

カレンダーの向こうがわ

小堺昂

うるー年の二月二十九日の真夜中に、カレンダーの向こうがわへ行けるらしい

かっちゃんが言ってたんよ

二月と三月のハザマに取り残されて、こっちがわに戻ってこれるのは四年後なんやって

腕がするりんと、まるで溶けてしまったみたいに、数字の世界に消えていくん

だあれもかっちゃんの言うことなんて信じんよ

かっちゃんはひとりで試してみるんやって

みんなバカにしてたわ

でもぼくはき、ひよっとすると、もしかしたら本当なんじゃないかって

だから試してみたいんよ

今日が二月二十九日だからさ

だれにも内緒でね

友だちにも、おとうにも、おかあにも、かっちゃんにも内緒でね

言ったらぼくまでバカにされると思うから

カレンダーはただの紙だってさ

ぼくだってそんなのわかってら

でももしかしたら、もしかすると、そうなのかもしれないじゃん

ごはんも食べて、お風呂も入って

おかあもおとうも眠ってからね

真っ暗な部屋に、理科で配られた豆電球を一つ照らして

二月のカレンダーに、近づいてみるんよ

黒と赤の数字がびっしり書かれた、数字の羅列で、目がぐるぐる回って

部屋の時計が、十二時ぴったり揃うまで、ほんの三十秒が、一日以上に感じ
てん

そしたらさ、三本の針が重なるまで、あとちよつとの時に、部屋のドアがガ
チャリと開いたんよ

あっ、って言ったたら、もう時計の針はバラバラなってる

「まだ寝てなかったの」

って、おかあが言うから、

「もう寝るよ」

って答えちゃって

だから、ごめんねかつちゃん

四年後になっちゃうな

そっちがわに行けるのは

二月のカレンダーを捲ったら、豆電球をしゅぽんと消して、眠るかな

始まったばかりの三月に、全て任せて、ぐっすりと

こっちがわでね